2024.06.26(水)　共生育むフロアバレー～盛岡視覚支援学校と杜陵高

【岩手日報】

共生育むフロアバレー

盛岡視覚支援学校と杜陵高

床上30㌢のネットを挟み、友情を育んだ。盛岡市の盛岡視覚支援学校（近藤健一校長）と杜陵高（三田正巳校長）の生徒は25日、フロアバレーボールで交流した。7月4日に市内で開かれる盲学校東北大会を前に、練習相手確保に苦慮する同年代の力になろうと杜陵高の生徒有志10人が助っ人を買って出た。開幕が迫るパリ五輪・パラリンピック。互いを知り、共生を目指すパラの理念を、岩手の若者が体現している。

「頑張って」「ありがとう」フロアバレーボールを通じて交流し、言葉を交わす盛岡視覚支援学校と杜陵高の生徒＝25日、盛岡市

練習サポート、互いを理解

パラリンピック理念体現

「速過ぎる」「半端ない」。盛岡市北山の視覚支援学校体育館。東北地区盲学校フロアバレーボール岩手大会に出場する10～30代の男女6人が繰り出す力強いボールに、杜陵高の生徒が驚きの声を上げた。

全国切符が懸かる大会だけに練習は真剣そのもの。杜陵高生徒がボール拾いやサーブ、ブロックなどで協力し、終了後は「頑張ってください」「ありがとうございました」と声をかけ合った。

中島絢香さん（杜陵高2年）は「大会に向けて、少しでも力になれたらいい。フロアバレーだけでなく、（視覚支援学校生の）日常生活ももっと知りたい」、田中翔大さん（同）も「目が見えない人たちが音を聞きながら競技していてかっこいい。パラリンピックを見る楽しみも増えた」と関心を高めた。

立地場所が近い両校は昨年から視覚支援学校の避難訓練の見学や、杜陵高OBによる講演などを通じて結びつきを強める。視覚支援学校は幼稚部から高校卒業後の年代の専攻科まで、全校23人。普段はボール拾い役が少ないなど練習に制約があり、杜陵高が校内で支援を募ったところ、有志が応じた。東北大会の運営も支える方向だ。

視覚支援学校専攻科1年で、フロアバレーボール部主将の阿部玲菜さん(19)は「練習に協力し、競技を知ってくれてうれしい。感謝の気持ちを持ち、一丸となって東北で優勝して全国に行きたい」と誓った。

さまざまな障害のある、世界中のアスリートが挑むパラリンピック。両校生徒の姿や言葉は、多様性を認め合い、共生社会の実現を促進する大会の意義と重なる。

「生徒たちはこれまでも点字の教科書を見せ合うなど、すぐに垣根を越える力を持っている」と同部監督の金野守指導教諭(55)。「交流を通じて、互いに思いや経験をさらに共有していければいい」と思い描く。

ネットの下を通すボールを打つ盛岡視覚支援学校の生徒

フロアバレーボール

視覚障害者と健常者が一緒にプレーできるよう考案された球技。6人制バレーボールと同じ規格のコートで、床から30㌢の高さに専用のネットを設置し、下を通過させる形で白いボールを打ち合う。音の鳴る鈴などは入っていない。前衛、後衛各3人で、前衛はアイマスクを着用。ボールの音や味方選手の指示を聞いてプレーする。

※　岩手日報 2024 年 4 月 26 日(水)付　この記事は岩手日報の許諾を得て転載しています。